

なぜ人口減少を止めなければならないのでしょうか？

「LRR I 会員・役員だより」令和 6 年 9 月号で、小浪岳治理事が“令和のプチ米騒動”と題して日本における食糧事情に関して問題提起をされました。本小文では、別の角度でこのことを考えてみます。

いうまでもなく、食糧、エネルギー、そして、水は、人間生活に不可欠です。それをめぐって、世界中で、貧困や格差が広がり、それが戦争にも繋がっていますが、にもかかわらず、日本（あるいは日本人）は、総じて、食糧、エネルギー、水の供給に対して楽観的すぎているのは著者一人ではないと思いますが皆様はいかがでしょう？ 事実、国際機関の SDGs への取り組みの国別での評価では、17 のゴールの中の“2 飢餓をなくそう”というゴールの日本の取り組みは年々評価下がっていて、筆者の独自の定量評価では、表 1 に示したように、17 のゴールのうちでも最低の点数です。ここにも食糧問題に対する日本の危機感の希薄さが実証されています。

表 1 日本の SDGs に対する国際的な評価の例

Goal	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
Icon																	
Year																	
2022	↑	↗	↑	↑	↗	↗	↗	↑	↑	●	↗	↗	↗	↗	↗	↑	↗
2023	↑	↘	↗	↗	↗	↗	↗	↗	↗	●	↗	↗	↘	↘	↘	↘	↗
2024	↑	↓	↗	↗	↘	↗	↗	↗	↗	●	↗	↗	↘	↘	↘	↘	↗
点数	15	7	13	13	11	12	12	13	13	—	12	12	10	9	9	11	12
(平均)	5.0	2.3	4.3	4.3	3.7	4.0	4.0	4.3	4.3	—	4.0	4.0	3.3	3.0	3.0	3.7	4.0

(↑ 進んでいる (5 点), ↗ やや進んでいる (4 点), → 現状維持 (3 点), ↓ 遅れている (0 点))

(注：国連の Global Sustainability Development Report (GSDR) (<https://sdgs.un.org/gsdrr>)の過去 3 年間のデータを筆者が整理した。点数化も筆者によるもので、GSDR とは無関係である。)

一方で、日本における人口減少が国の存亡にかかわる深刻な事態だというのが共通認識になっており、政府を中心に盛んに対策が提案されていますがうまくいっているとは思えませんし、これからもうまくいく見通しは立っていません。確かに、経済成長という観点からは、実業界では人材不足など、政府では社会保障負担の増加などの課題に襲われます。しかし、一方で、単純に考えると、人口が減れば、食糧、エネルギー、水の確保や安全保障への負担は軽くなります。資源獲得競争も緩和されるのではないのでしょうか？ その結果、紛争や戦争の要因を減らすことにもつながります。

世界を眺めてみると総じて先進国と自称している国はいずれも大なり小なり人口減少に悩まされていますが、では、人口増加している国は満足でハッピーなののでしょうか？ 答えは、No で、人口増加で悩まされている国々はたくさんあります。それらの国で深刻なのは、食糧、エネルギー、水の確保にあると考えられます。気候変動もこのことに深くかかわっていますが、表 1 でもわかるように日本における SDGs の“ゴール 13. 気候変動へ対策を”の取り組みの評価は高くありません。

こうして考えていきますと、人口減少は必ずしも悪ではなく、良い側面もあるのではないかと考えられます。むしろそれらを生かした国づくりをしていくことが新しい日本の国の形が見えて来るのではないのでしょうか？ こう考えているとき、令和 6 年 9 月 15 日の読売新聞朝刊の論説「地球を読む」で、UCLA のシャド・ダイヤモンド博士が同様のことを書かれているのを読み、意を強くしました。“出生率低下で人口が減少する世界は平和的で安定し、幸福で豊かな世界だといえるかもしれない”という結びは一考に値するメッセージだと思っています。政治家の方々や実業界の方々はどのように評価されるのでしょうか？ ただ、不明にして同博士の著書「銃・病原菌・鉄」（草思社、2013）が発刊当時世界的なベストセラーになっていたことを知りませんでしたので、早速、電子書籍で購入して読んでいます（10 月 12 日現在）。壮大な人類史が描かれていますが、博士の警告の根拠がわかるような気がしています。

話が突然飛躍しますが、9 月の自民党の総裁選はまれにみる滑稽な喜劇のように筆者には映りました。人口減少が続くこの国をどのような国にするのかを問うことが重要と強調していた候補者は唯一石破茂氏だけでした。しかし、総理になってからは、“この国をどのような国にするのか”について具体的な構想を聞くことができていません。止めることができない（と筆者は思っています）人口減少を是とするのか非とするのか、お聞きしてみたいものです。

繰り返しになりますが、結論的に言って、諸般の事情を勘案しますと、人口減少は悲観的な状況ではなく、むしろそれを生かした国づくりに舵を切ることが日本にとって必要で、今がその絶好のタイミングではないかと思っています。人口は少ないが豊かな国は数多くあります。SDGs の取り組みの評価が常に高い北欧の国々はその典型例です。そのような国々の国づくり・人づくりを学ぶ必要はないのでしょうか？

こうして書いていきますと、先の長くない老人の無責任なたわごとと言われるかもしれません。それは、覚悟しています。それでも、“この国をどのような国にするのか”と問い、一個人としてもそれに対する答を持っていなければなりません。そうしなければ、次の世代に取り返しのできないつけを残すこととなります。そこで、最後に、叫びたいのです。“怒れ、若者たち！”と。

この人に 任せて良いのか この国を

聞こえてこない若者の声

（代表理事 安原一哉）